

第 270 回研究報告会 (4 月 21 日)

「アボリジナル・オーストラリアへの旅～中央オーストラリア・ラジャマヌへの調査旅行」

スティーヴン・ワイルド、土井幸宏

オーストラリア・アボリジニ・トレス海峡諸島民文化研究所 (AIATSIS) 元研究部長で、オーストラリア国立大学 (ANU) 音楽学部シニアフェローであるスティーヴン・ワイルド博士は、2008 年に土井幸宏と行ったラジャマヌでの調査旅行を民族音楽学的な角度から紹介した。

まず、調査旅行先の中央オーストラリアのアボリジニ集落ラジャマヌの紹介から始めた。この地の先住民はワルピリと呼ばれる言語を話す人々である。オーストラリア政府が 1950 年代初めに南タナミ砂漠に住む彼らのためにこの町を作ることで、子どもたちは学校に行き、人々は健康診断や職業訓練などのサービスを受けられるようになった。村には他にも図書館、商店、バプティスト派教会、アボリジナルアートのためのアートセンター、チャーター機のための空港、ガソリンスタンドや車修理場、そして約 700～800 人が暮らす家屋がある。

ラジャマヌにおけるワイルド氏の最初のフィールドワークは 1969 年から 1972 年に始まった。当時、数多くの音声記録と写真撮影を行い、資料をキャンベラの AIATSIS に保管していたが、約 40 年後、これらの資料を返還する事業として 2007 年にワイルド氏はラジャマヌに向かった。その時の人々の好反応から、より多くの資料を返すことにしたのが 2008 年の旅行の目的である。1970 年代のワイルド氏のラジャマヌ調査の業績を更新すべき時期に土井が ANU に入学したため、私たちは一緒に旅行することを決めた。

1970 年代の儀礼的生活はとても活発であったが、2007 年までには砂漠で育った人々はほとんど亡くなり、若者は儀礼と現代生活とはかけ離れたものと見るようになっていた。そうした中で、ラジャマヌ学校で集落仲介役員を務めるワルピリの男性スティーヴン・ワンタ・ジャンピジン氏 (2011 年に土井と来日、天理大学で講演) が若者と長老たちが一緒に参加できるような祭りを作ることにした。

その祭りで学校の子どもたちはヒップホップを踊り、長老たちは砂漠の古代歌舞を披露した。この現代化された祭り「ミルピリ」を通して、長老たちと若者たちとのギャップが縮まり、ワルピリの土地と古代儀礼との綿密な関係が維持された。キャンベラから飛行機と 4WD の運転で 3 日をかけてラジャマヌに向かい、更なる古い資料が返還され、その後のミルピリ祭りの研究を続ける土井とワンタ氏が初めて出会い、調査の目的が達成した。

発表当日、ラジャマヌに向かう途中の聖地デビルズ・マーブルズ (悪魔のおはじぎ) や北部準州の景観を代表する巨大なシロアリ塚、野生化されたラクダが通る道や、滞在中に目撃した教会聖歌隊や少年たちのプラバ儀礼の写真のほか、2009 年のミルピリの映像も一部公開した。会場からは障害を持つ人々への集落の対応やアボリジナルアート、スキンネームが意味する親族関係に関する質問が出た。

若田光一さんと雅楽部とのコラボ

去る 5 月 3 日の午前 1 時 30 分から午前 2 時 30 分の間、宇宙飛行士の若田光一さんと雅楽部が NASA を経由して、コラボが実現した。若田さんは笙を演奏、NASA にスタンバイしたケンジ・ウィリアムスさんがヴァイオリンで応じ、続けて雅楽部が『越天楽』を演奏した。まさに ISS (宇宙ステーション) と NASA と天理が一つになり、響き輝いた時を共有したのである。



事の発端は、ケンジさんが、古代から日本に伝わる楽器である笙に注目し、これを宇宙から若田さんに演奏して貰いたいと思ったことにある。ケンジさんは、ベラ・ガイアの活動

を通じて若田さんと交流があった。ベラ・ガイアとは、ケンジさんの映像作品で、NASA の宇宙衛星が観測した G データをハイエンド 3D 映像により可視化したものに、世界の文化遺産などの映像を重ね、ライブ演奏をも取り込んだものである。たまたまケンジさんと天理教のニューヨーク文化協会の責任者である福井陽一さんとが親交があり、福井さんより天理大学の佐藤に、笙の提供の申し出があったのである。

佐藤は、昨年の 7 月 12 日、調律した笙と、笙の手移りや拙著『雅楽 源氏物語のうたまい』などを入れた 2 個口の品物を、郵便局に託した。ところが、8 月 24 日になって、どういうわけか、笙だけが帰ってきたのである。郵便局に尋ねると、7 月 25 日には、ヒューストンのスペースセンターの若田さんのところに届いているのが確認できたが、笙の方は受取人不在で戻って来てしまったのである。戻ってきた笙をみると「七」のリードが外れていたのである。何処ではずれたかは定かではないが、笙みずからが修理を望んで帰ってきたものと思われる。今度は念入りに蜜蝋をつけ、直ちに送った。若田さんの手に、リードの外れもなく無事届いていることを、映像をご覧頂いた方には、お分かり頂けたと思う。

無重力であると、笙を手離してもそのままの状態である。若田さんは、笙の演奏を、「宇宙遊泳のようだ」と表現していた。将来、「観月」演奏ならぬ「観地」演奏をしてみたいものだ。

(佐藤浩司記)

(From page 13)

Kensaburo Matsuda — Regarding “Delving Deep Into the Gap of the Folds” (15) “Into the Gap of the Folds . . .” [15]

When Cezanne sought to implement a natural equilibrium and nuance to his rendering of dishes and bread, the crowning radiance, the whiteness of snow, and every moment of tremor are recreated in exact manner. There lies the reason why it is called “mystery” as well as “primordial experience.” However, embedded is a condition where, “inattention can ... lead to scattering into pieces.” “Cezanne’s suicide” or “single paradox of his artwork” tells such story. Seeking reality and yet proscribing oneself from employing any and all means to attain it as an artist: this is Cezanne’s style of painting. This style, and this moment, is said to enable “thing” to “take form before our very own eyes.” Here, it is not difficult to predict the transformation